

技術情報 第7号

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員  
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

トビイロウンカ防除の徹底について

気温が高く、トビイロウンカの増殖しやすい状況が続いており、一部で坪枯れ寸前のほ場も見られます。それぞれのほ場をきめ細かく確実に見回り、発生状況に注意し、要防除水準を超えているほ場にあっては防除の徹底を指導願います。

1 作物名 水稻

2 病虫害名 トビイロウンカ

3 調査結果(8月6半旬)

- (1) トビイロウンカの発生ほ場率は、8月4半旬の巡回調査では78.3%、8月6半旬では79.6%と依然として高かった(8月5半旬値: 平年39.5%、前年5.3%)。
- (2) 成虫と老齢幼虫の10株当たり合計密度は、発生量の最も多かったほ場では61頭、少なかったほ場では0頭、平均6.4頭であった。発生量は、ほ場間差が極めて大きかった。
- (3) 増殖率の高い短翅型雌率は66.1%で、今後発生量が増加する恐れがある。
- (4) 育苗箱施薬のみで、これまでに本田での防除が実施されていないほ場の中には要防除水準を超え、坪枯れの発生が懸念されるほ場も見られる。

要防除水準(9月上旬): 成虫と老齢幼虫の合計密度10株当たり50頭

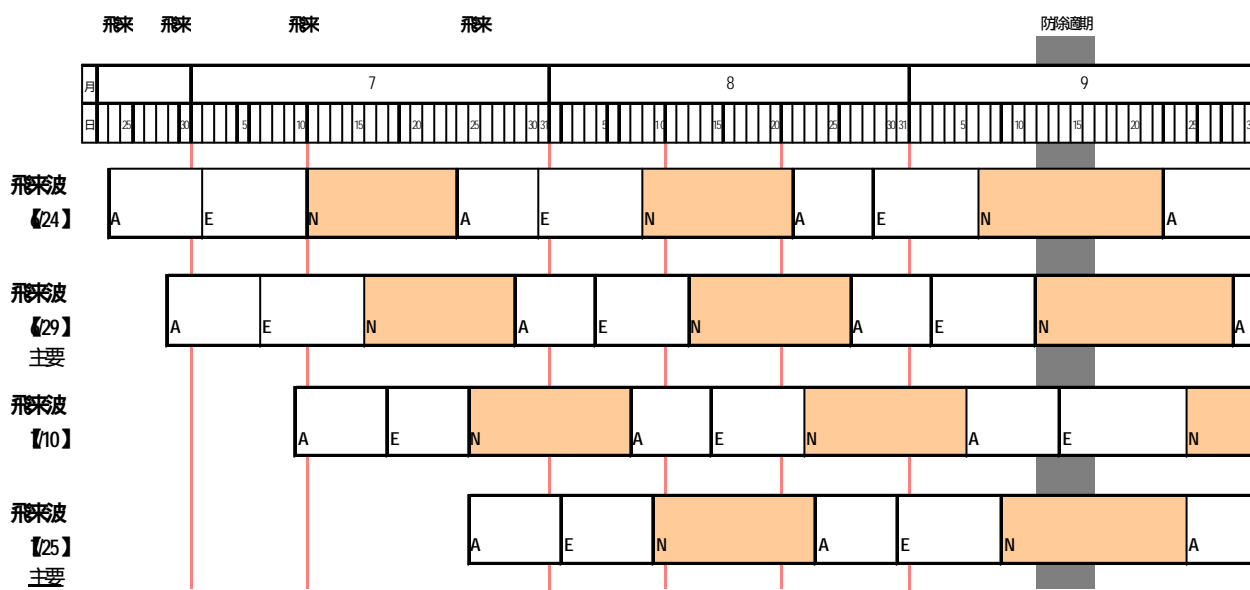
- (5) 福岡管区气象台発表(8月28日付)の1か月予報によると、向こう1か月の気温は、平年並または高い確率ともに40%で、本種の増加に好適な条件が続くと予想される。

6 防除上注意すべき事項

- (1) 本年は海外飛来性ウンカ類の飛来回数が多く、6月24日、6月29日、7月10日および7月25日の4回、飛来が見られた(図)。この発生パターン図によると、8月下旬には卵期が主体のほ場も多かったと推定されるので、残効の短い薬剤が散布された場合、防除効果が上がり難いと考えられる。
- (2) 発生パターン図によると、9月中旬が幼虫発生期で防除適期と予想されるので、この時期の発生状況には十分注意する。

- (3) 本種の発生量は、ほ場間で大きな差があるので、ほ場ごとに確実に確認し、要防除水準を超えたほ場では早急に防除を行う。
- (4) 薬剤が株元まで届くように規定量を散布する。出穂したほ場では薬剤が株元まで届きにくいので、散布後に防除効果を確認する。
- (5) 粒剤を使用する場合は、湛水状態(3 cm 程度)で、田面に均一に散布し、4～5日間は湛水状態を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしない。
- (6) 農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を順守するとともに、飛散低減に努められるよう指導願います。
- (7) 「夢つくし」等早植品種で、1週間以内に収穫予定の場合は、農薬の使用規制のため薬剤散布ができないので早めに刈り取る。
- (8) 防除薬剤については、「平成21年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

図 飛来に基づくヒロウガ発生予想パターン図



- (注) (1) 発生段階  
 A 成虫 E 卵 N 幼虫  
 (2) 気温は大宰府のアメダスの平均気温を使用した  
 (3) 平均気温は8月27日までは本年のデータ 8月28日以降は平年値